

チャーチルのフルトン演説

「鉄のカーテン」産みの親

田 村 幸 策

一 一九四六年三月五日チャーチルは友人たるツルーマン大統領の招きに応じ、大統領の生れ故郷たる米國ミズーリー州フルトンのウエストミンスター大学において次のごとき一場の演説を行った。それが有名になって「鉄のカーテン」演説として後世に伝へられるに至ったものである。成程チャーチルが鉄のカーテンなる言葉を「公式」に使用したのはこの演説が最初であるが、かれは先是一九四五年六月四日ツルーマン大統領への「私電」においては既にこの言葉を使っていることを付記せざるをえない。

バルチック海に面するステツチン港からアドリアチック海に面するツリエスト港に至るまで、ヨーロッパ大陸を横断して「鉄のカーテン」が降下されている。その線の背後には中部および東部ヨーロッパにおける、すべての国家の古い首都が存立している。ワルシャワ、ベルリン、ブラーグ、ウィーン、ブダペスト、ベルグラード、ブカレスト、ソフィヤがそれである。これらの有名な都市とその周辺の人口とは、すべてソ連の勢力圏内にあつ

て、そのすべてはなんらかの形においてソ連の勢力に服するのみならず、極めて高度にして、しかも増大しつつあるモスクワからの支配に服従せしめられている。独りギリシャの首都アデンスのみが英米仏三大国の看視下に不滅の栄光をもって自己の将来を決定する自由を与えられている。ロシアの支配下にあるポーランド政府はドイツに対し大規模にしてしかも不正な侵略を行うよう激励され、悲痛にして思いもよらない規模における数百万のドイツ人の大量放逐が行われつつある。東ヨーロッパのすべての諸国においては極めて少数である共産党が、これらの黨員の数を遙かに越えた卓越的地位に昇り、到る所において一国一党主義的支配を要求しつつある。殆んどあらゆる国において警察国家が行われている。チェコスロバキア国を除き真の民主主義国家は存在しない。

二 翌一九四七年八月四日チャーチルはブレナムにおける演説で再び対ソ問題を取上げ、「鉄のカーテンの両側に太陽の光を与えよ。もし太陽の光がカーテンの両側に平等に与えられるに至れば、カーテンはもはやないのと同じになる」とカーテンの撤廃を要求する演説を行い、更に二年後の一九四九年八月一七日ストラスブルグでの演説においては「ヨーロッパにおける古い一〇個の首都が鉄のカーテンの背後にある。ヨーロッパ大陸の大部分は行動の自由を奪われている。この大陸の大部分はドイツのナチ主義からは免れえたが、今後はナチ主義と同じような極端な共産主義の支配下に転落した。それは恰も北極圏を離れんがため長途の苦しい旅を行いながら、結局、南極圏に入ったことと同じであって、そこには満面氷と雪と激しい刺すような寒風があるのみ」とのべている。

三 チャーチルは一九五三年一月記者会見において「諸君は私のフルトン演説をお記憶でしようが、当時私はそれがため多大のトラブルをうけた」と声明している。事実かれのこの「対ソ警戒声明」は当時反対者からは嘲笑されたが、間もなくそれが正しいことが明白に立証されたのである。